

短期大学における「教職実践演習」の取組状況についてⁱ

新田 司

“Seminar on Teaching Practice” in Junior College

Tsukasa NITTA

2011年度後期より4年制大学に先がけて、短期大学において「教職実践演習」が実施された。本学も含め、各短期大学では試行錯誤しながら2012年度で2度目の実施となった。本稿では各短期大学、本学における「教職実践演習」の取組状況と課題について述べ、今後の演習のあり方について検討する。

1. はじめに

2006年7月、中央教育審議会より「今後の教員養成・免許制度の在り方について」が答申され、「教員として必要な資質能力の最終的な形成と確認」をめざす「教職実践演習」の新設と必修化が諮問された。2008年教育職員免許法施行規則の改正により、「教職実践演習」が導入され、翌2009年4月より施行された。4年制大学においては、2013年度後期の実施となったが、短期大学は4年制大学に先立つ2011年度後期の実施となり、各短期大学では手探りの状態で準備、実施にあたった。今年度、2度目の実施となったが、未だに試行錯誤の状態で実施しているのが実態である。

本学では、2008年に教職実践演習準備委員会を立ち上げて、担当教員を中心に履修カルテの検討、文部科学省の「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」（以下、「留意事項」）等を参考にカリキュラムの作成を行うなど、開設準備にあたった。一方で、拙者は関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会（以下、関私教）の研究部会である短大部会に参加して、部会に参加する短期大学のメンバーと各校での取り組み状況や課題などについて、意見交換や検討を重ねてきた。2011年度後期より教職実践演習が実施されてからも、リアルタイムで実施状況や進捗状況についての経過報告を行ってきた。

本稿では、2011、12年度に実施した教職実践演習の取組状況について、上記の関私教の短大部会に参加する各短期大学の状況と本学の状況について報告し、今後の課題について検討していきたい。

2. 短大部会参加校の取組状況について

関私教の短大部会に参加している7短大の取組状況についてアンケートを実施し、以下の各項目について回答を得たⁱⁱ⁾。各項目について順に紹介する。

1) 各短大が設置している教職課程(数は延べ数)

幼稚園教諭が5校、小学校教諭が2校、中学校教諭家庭が2校、英語・国語・保健体育が各1校、養護教諭が1校、そして栄養教諭が3校である。

2) 各短大の実施状況

各短大の受講学生数であるが、50名以下が3校、51～100名が1校、101～150名が1校、151名以上が2校となっている。担当教員については、3名と7名が各2校、5名、10名、そして15名が各1校である。

クラス(グループ)分けであるが、各短大で以下のような形で実施された。

◎10数名のグループを3つ作る

◎18～19名を成績順で10クラス作る

◎ゼミのクラスをもとに20名程度のグループを7つ作る

◎履修者全員で1クラス(10～20名)

◎30名程度を1クラスにして、学籍番号順でクラス分けをする

実施形態については、各短大の学生数や教員の数に応じて、以下のような形態で実施された。

◎15回をすべて1名で実施

◎3名の担当者が4回ずつ担当

◎複数担当者がローテーションを組んで実施

◎複数担当者が15回すべて同席して指導(免許取得クラスごと)

3) 教育委員会・学校との連携(協議・意見交換)の状況

「留意事項」において「連携先となる教育委員会及び学校を確保することや授業計画の立案に当たって、当該教育委員会又は学校の意見を聞くことが望ましいこと」とあり、各短大がそれぞれの事情に応じて、取り組んできた。連携の状況については、次の3点に集約された。

1点目は教育委員会、教育長、校長会、校長、園長との意見交換・懇親会、2点目は教育長、指導主事、校長会長、校長、養護教諭、学校医、幼稚園長、スクールカウンセラーによる講演、3点目が小学校長、幼稚園長をパネリストとするシンポジウム、であった。

4) 実施方法について

「留意事項」をみると、授業方法については「演習を中心」とし、「役割演技（ロールプレイング）、事例研究、現地調査（フィールドワーク）、模擬授業を積極的に取り入れること」が望ましいとされた。また「学校現場の視点を取り入れる観点から、必要に応じて、現職の教員又は教員勤務経験者を講師とした授業を含める」ことも挙げているが、各短大の方法については、以下のように実施された（校数は延べ数）。

グループディスカッションは6校で実施、ロールプレイングは5校、現地調査は2校が実施した。模擬授業は全7校で実施し、事例研究は6校、そしてゲストティーチャーによる授業は3校が実施した。現場での実習は3校で実施した。具体的には「1年生が2年生の教育実習（家庭科）の授業を見学」、「1年次に市内小学校での食育指導体験〔給食の配膳・片付け等を含む〕を実施」、「小学校での授業、帰りの会参観」であった。

講話・講演は全7校が実施した。具体的には、現職教員（幼保小中）によるものが5校、演習担当者以外の大学教員によるものが2校、外部講師による講話・講演が5校で、外部講師の所属については、教育委員会（教育長・指導主事）、学校関係者（校長会長・養護教諭・学校歯科校医・スクールカウンセラー）、幼稚園関係者（市立幼稚園長・私立幼稚園長・前区立幼稚園長・私立幼稚園教員）、社会福祉施設関係者（児童養護施設長・知的障害者施設保育士・保育所保育士）、保育施設代表であった。その他として2校で個別面談、小学校長による模範授業が実施された。

5) 演習で取り扱った主な内容

「留意事項」の「教職実践演習の進め方及びカリキュラムの例」に挙げられた「授業で取り扱う内容・方法例」では、以下のように列挙されている。

- ◎イントロダクション・これまでの学修の振り返りについての講義・グループ討論
- ◎教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責任等についてのグループ討論・ロールプレイング
- ◎社会性や対人関係能力（組織の一員としての自覚、保護者や地域の関係者との人間関係の構築等）についての講義—グループ討論
- ◎幼児児童生徒理解や学級経営についての講義—グループ討論
- ◎学級経営案の作成—グループ討論
- ◎学校現場の見学—調査
- ◎社会性、対人関係能力、幼児児童生徒理解、学級経営についてのグループ討論
- ◎教科・保育内容等の指導力についての講義・グループ討論
- ◎模擬授業

◎教科・保育内容等の指導力についてのグループ討論

◎資質能力の確認、まとめ

では、各短大で実際に実施された内容はどうであったか。以下、アンケートに記載された内容を拙者が集約してまとめてみたのでご覧いただきたい。

- ①教育実践演習の目的と内容
- ②建学の精神
- ③教員として求められる資質・能力・人間性（教師としての使命感，責任感，教育的愛情，倫理意識／教員の服務と研修／教職の意義，教員の役割，職務内容の理解，実践的指導力
- ④社会人としての基本に関わる事柄（マナー，規範意識，順法精神／社会性，対人関係能力とコミュニケーション能力，組織内での社会性）
- ⑤学校経営・学級経営（学級経営〔保健室経営〕）／学級組織づくりと小集団指導と討論の指導／幼小との連携理解と指導／保護者への対応
- ⑥授業研究（指導案の作成，指導計画の立案〔記録の取り方〕／教材研究，教材の作成／模擬授業／学校長による模範授業）
- ⑦子どもの発達（発達段階の理解及び子ども理解の拡張・深化，乳幼児の発達理解／特別な支援を必要とする親子に対する指導，子どもたちへの対応／教育相談の現状と課題
- ⑧教育実習（研究授業の振り返り，研究授業のVTRを見て振り返り／教育実習Ⅱにおける授業実践の総括〔研究授業ビデオの視聴と研究／研究授業指導案にもとづく模擬授業〕）
- ⑨教職履修カルテによる学習の振り返りと自分の今後の課題の抽出
- ⑩保育技術（人間関係，音楽表現，言語活動，造形表現，身体表現）
- ⑪現地調査（事前学習・まとめ・発表会）
- ⑫教職実践演習の振り返りとまとめ

「留意事項」と実際に実施された内容を比較すると，ほぼ網羅されていることがわかる。一方で，すべてを網羅して実施している短大は，アンケートを確認する限りほとんどなかった。その理由として，各短大によって課題や担当者，実施する条件が異なるためであると推察される。

6) 履修カルテについて

短大部会では，教職実践演習開始前の段階から各短大で作成した履修カルテを持ち寄り，内容について意見交換を行ってきた。今回のアンケートでは，履修カルテの管理・保管，そして活用の状況について各校の取組を聞いた。

管理・保管状況について，在学時に大学側で管理（電子カルテも含む）したのが6校，学生に管理させたのが1校であった。また卒業時の扱いについては，大学が保管（電子カルテ

短期大学における「教職実践演習」の取組状況について

も含む)したのが5校、学生に返却したのが2校であった。なお、大学が保管したケースでは、電子カルテのため返却できない短大が2校、履修カルテをコピーしたものを返却した短大が1校、そして返却するかわりにカルテの内容を口頭で学生に伝えた短大が1校であった。

カルテの活用については、以下のような状況であった。

- ◎履修カルテをもとに個人面接・進路指導・履修を指導・卒論指導を実施した
- ◎学習の振り返りと自分の今後の課題の抽出を行った
- ◎演習の実施に先立ち履修カルテを見直した上で「自らの達成状況と課題」についてレポートを書かせた
- ◎教職課程の各单位について、教員によるコメント（理解度、到達度について）を付した評価を掲載し、同時に学生自身による自己評価（それぞれの講義で何を学び、何が課題として感じられたか）を記入させた
- ◎履修カルテを2種類作成し、履修カルテ①では学生が受講した各講座の教員が評価を行ったものを、ゼミ担当者が最終的に総合的に評価して、複数の教員によって評価を行う、履修カルテ②では1年次の最後と2年次の最後に、1年次と2年次の評価を比較させて自己診断させた
- ◎各科目の自己評価をさせ、成績発表後に成績を記入させた。1年後期には1年の学習の振り返りについて記入させ、2年前期には実習に関するコメントを記入させた。演習では毎回の授業時に学生に配布し、授業で活用できるようにした

以上のような活用状況であったが、実際の演習時に十分に活用できていないとの回答もあげられた。この点については、後の課題でも触れたい。

7) 評価について

教職実践演習での評価について、評価の対象と方法について回答を求めた。評価対象となったのは、出席状況、提出物、各授業で実施するレポート・小テスト、授業への参加状況、グループ発表、発表レジュメであった。

評価方法については、担当者による総合的な評価が主で、各回の授業での評価についてはゲストスピーカー（ティーチャー）にも協力を求めた短大もあった。具体的な評価方法については、以下の通りである。

- ◎毎回の履修内容等についてのレポート提出を求め、これまでの各実習等への参加状況等を保健室経営力・健康教育力・企画力・コーディネート力・マネジメント力等の視点から評価
- ◎各教員が担当分について評価したものを持ち寄り総合的に判断し評価
- ◎毎回の授業で実施する小テストと公開講座と現地調査レポートを評価し、その得点をも

とに担当者全員で総合的に評価

◎グループごとにレポートを書かせ、日常の授業の様子を加味して評価し、担当者の評価を合わせて、統一して評価

◎各クラスの担当が評価の責任者として評価案を作成し、ゲストティーチャーなどの協力を得て、学生の感想文、製作物などの提出物、出席状況、授業態度によって評価

◎出欠、提出物の提出、グループ内で果たした役割、発表などを総合的に評価

◎発表レジメ作成やスライド作成状況、模擬授業のレポートにて評価

◎出席状況と各時間に課す感想文の内容によって評価

以上、各短大の実施状況について、アンケート結果をもとにみてきた。各短大の規模、受講学生、担当教員などの教育条件が多様であり、それに応じて作成されたカリキュラムも各短大によって大きく異っていることが明らかになった。次項では具体的な例として、本学の取組状況について述べる。

3. 千葉敬愛短期大学の取組状況について

1) 本学の実施状況

本学では取得する免許・資格によりクラスを編成している。2011年度に入学した学生については小学校教諭二種免許と幼稚園教諭二種免許取得クラスが1クラス、幼稚園教諭二種免許と保育士資格取得クラスが4クラス、そして小学校教諭二種免許・幼稚園教諭二種免許・保育士資格取得クラスが1クラスの計6クラスで編成されている。教職実践演習に関しては、小学校を志望する学生が「教職実践演習」を、主に幼稚園や保育所の就職を志望する学生が「保育・教職実践演習」を履修しているⁱⁱⁱ。そこで、この節では「教職実践演習」と「保育・教職実践演習」それぞれの状況について述べていく。

まず、それぞれの実施状況については、下の表1の通りである。

〔表1〕 本学の実施状況

	小 学 校 (「教職実践演習」)	幼 稚 園 (「保育・教職実践演習」)
受講学生数	27名	154名
担 当 教 員	2名	5名
ク ラ ス 数	1クラス	5クラス (30 / 32名)
ゲストティーチャー (スピーカー)	1名	5名 (うち専任1名)

短期大学における「教職実践演習」の取組状況について

教育委員会や学校（教育現場）との連携については、「教職実践演習」では小学校での現地調査と小学校長による模範授業を実施し、「保育・教職実践演習」では小学校長・幼稚園教頭をパネリストとして招聘し、シンポジウムを開催した。

授業方法については、下の表2にまとめた通りである。「教職実践演習」では、各方法を網羅的に実施したが、「保育・教職実践演習」では、「現場での実習」と「模擬授業（保育）」を実施していない。その理由として、教育実習Ⅰでの事前指導において模擬保育を実施しており、また11月に保育実習（一部施設実習）があり、「保育・教職実践演習」の履修時期に現場での実習があるので、含む必要がないと判断したからである^{iv}。

〔表2〕 授業方法について

	小 学 校 （「教職実践演習」）	幼 稚 園 （「保育・教職実践演習」）
グループディスカッション	○	○
ロールプレイング	○	○
現地調査	○	○
現職教員による講話・講演	○	○
外部講師による講話・講演	○	○
現場での実習	○	
模擬授業	○	
事例研究	○	○
ゲストティーチャーによる授業	○	○
その他	小学校長による模範授業	講義

※○が各演習で実施した方法

2) 授業内容

小学校を志望する学生が受講している「教職実践演習」の授業内容は、以下の表3のように進められた。

[表3]「教職実践演習」の演習内容

回	内 容
第1回	オリエンテーション
第2～4回	教育実習の振り返り。 ※グループディスカッションにより成果、課題を導出し各自で共有
第5回	事例研究(学級崩壊)
第6回	現地調査(事前学習)
第7回	公開講座
第8～10回	現地調査(小学校への現地調査, まとめ, 発表会)
第11回	道徳模範授業(小学校長による授業)
第12～14回	模擬授業(グループで指導案を作成)
第15回	気になる子どもたちへの対応, 振り返りとまとめ

現地調査は、本学が所在する佐倉市に隣接する四街道市の小学校で実施した。小学校において、授業参観、帰りの会参観を行い、校長先生より講話を伺った。授業参観に関しては、11の班を作り、班単位で各学年の授業を参観した。その後の演習内で、現地調査で得たことを班ごとでまとめ、その成果を発表会で発表した。

幼稚園・保育所を志望する学生が受講している「保育・教職実践演習」の演習内容は、表4の通りに実施した。

[表4]「保育・教職実践演習」の演習内容

回	内 容	回	内 容
1	オリエンテーション	9	現地調査の代替
2	ローテーション1①	10	ローテーション2②
3	ローテーション1②	11	ローテーション2③
4	ローテーション1③	12	ローテーション2④
5	ローテーション1④	13	ローテーション2⑤
6	ローテーション1⑤	14	シンポジウム
7	「現代子ども学」公開講座	15	まとめ(自己評価・振り返り)
8	ローテーション2①		

短期大学における「教職実践演習」の取組状況について

ローテーションによる授業では、授業担当者のクラスに、クラス分けした学生が毎回移動して受講をし、各ローテーションで計10の授業内容を受講した。上記のローテーション1と2の内容が、表5と表6である。なお、担当欄の「G」はゲストスピーカー、「専」は演習担当の専任教員のことである。

〔表5〕「保育・教職実践演習」の【ローテーション1】

担当	授 業 内 容
G 1	「社会人としてのマナーと組織内での社会性について」
専 1	「教職の意義、教員の役割、職務内容について」
専 2	「保育技術の向上を目指して」～幼児期における豊かな言語活動について～
G 2	「幼稚園教諭としての責任と子ども・保護者への対応について」
G 3	「保育記録と指導案の作成」

〔表6〕「保育・教職実践演習」の【ローテーション2】

担当	授 業 内 容
専 3	「保育技術の向上を目指して」～幼児期の心の発達と人間関係について～
G 4	「保育技術の向上を目指して」～幼児における豊かな音楽表現について～
G 5	「幼児理解とクラス経営～特別な支援を要する子への対応など教育の今日的な課題について～」
専 4	「保育技術の向上を目指して」～幼児期における豊かな造形表現について～
専 5	「保育技術の向上を目指して」～幼児期における豊かな身体表現について～

「保育・教職実践演習」の現地調査は、実習園の行事の進行等を手伝うなかで、実習を通して得た課題を解決させることを目的として実施した。調査に先だって課題を立てさせ、調査後レポートを記入させて提出をさせた。

3) 履修カルテの活用について

本学の履修カルテは、主に「授業に対する自己評価」「教育実習についての記録」「事前・事後評価票」で構成されている（巻末参照）。「授業に対する自己評価」は、前期・後期の学期末に全学生を集めて実施する成績発表に先立って、履修した科目に対して4段階の自己評価を記入させている。発表後、各科目の成績を記入させ、自己評価との比較を行わせている。また、1年の最後には「一年間を振り返っての自己評価」欄に、2年前期の学期末には「教職

実践演習を受けるにあたっての自己評価」欄にそれぞれ記述による自己評価を記入させている。「教育実習についての記録」については、「教育実習を通して学んだこと」と「教員として必要な知識技能において不足していると感じた点」の欄からなり、教育実習を終えた2年前期の学期末に記入させている。「事前・事後評価票」については、4つの事項をもとに構成した評価票を作成し、演習前に「事前評価」を、そして演習の最終回に「事後評価」を実施し、演習の前後で自己評価を行っている。

「教職実践演習」では学期ごとの成績をもとに振り返りを行う際に、履修カルテを活用した。「保育・教職実践演習」では昨年度演習時に活用できなかったため、今年度は毎回の授業時に学生に配布し、授業で活用することとした。各担当教員は、「実習の振り返りに使用」、「授業導入時にこれまでの学習内容の振り返りとして使用」、「授業を行う際に参考にしている」、「事前に、授業者が、学生たちの「事前・事後評価票」に目を通し、自己評価が低い項目等をチェックして講義に生かす。授業の冒頭において、「事前・事後評価票」のうち、当該授業に該当する箇所の自己評価について、学生に確認させ、講義の位置づけの明確化を図る」、等の活用をした。

4) 評価について

「教職実践演習」では、毎時間の授業でのレポート課題とグループごとの評価（道徳指導案、現地調査発表）によって評価した。「保育・教職実践演習」では、毎回の授業で実施する小テストと公開講座と現地調査レポートを評価し、その得点をもとに担当者全員で総合的に評価を行った。

5) その他（特記事項等）

「教職実践演習」では、学生を6名指名し、コーディネーターとして担当者と打ち合わせをしながら、授業計画、運営を行った。「保育・教職実践演習」では、実習記録を使用して授業を実施した回があった。

4. 教職実践演習を実施しての課題

1) 各短大で2011年度実施した上での課題について

2011年度、各短期大学では、先に述べたように試行錯誤を重ねながら初めての演習に臨んだ。関私教の短大部会では、演習が実施されている最中に研究部会を開催し、各短大より実施状況についてリアルタイムに報告された。報告では各短大の実施の経過と課題が示され、その都度部会では意見交換が交わされ、検討を重ねてきた。

最初の演習を終え、以下の課題が各短大より示された。

①教育実習との関係

- ◎二年次後期にまだ教育実習中の学生もいて、実習終了後に集中で実施する授業時間の確保が授業との関係で困難である
- ◎実習期間を一律に設定することが困難で、実習前の学生も一部の内容を受講している
- ◎実習終了後、2単位の教職実践演習を外部講師も入れて実施することには、実際に無理がある

②教職履修カルテ

- ◎教職実践演習での「活用」という履修カルテの本来の意義が果たせなかった
- ◎履修カルテの形式、集約・保存の仕方等が模索段階である
- ◎教職専門教科について記入させているが、活用方法を十分に検討する必要がある
- ◎電子カルテにすると教科間、個人間の比較ができず、結局プリントアウトしている

③クラス編成

- ◎一クラスあたりの人数が多い（30～38名）
- ◎編成方法
- ◎各クラスにクラス担当の教員が1クラスを通して指導することにしたため、教員の専門性に依存
- ◎履修者が少人数でゼミ形式となり、各学生・教員とのコミュニケーションが取りやすい反面、議論や模擬授業等の実施において活発さに欠け、ともすれば馴れ合いになりやすかった。
- ◎知らない学生同士でクラス編成をしたため緊張感があり、グループワークや話し合いやロールプレイが効果的ではない場面もあった

④講師・ゲストスピーカー

- ◎現職教員による講話をお願いする際、事前に学生の現状を伝えることができず、教員になる上での一般的なアドバイスになってしまった
- ◎ゲストスピーカーとの打ち合わせが不十分

⑤授業方法・運営

- ◎最終回に演習で学んだことをまとめて発表したか、授業の早い段階で一度まとめたものを発表し、それにより気づいたところをさらに深めて調査研究する方が、効果的だった
- ◎実習日誌や指導案を持参させ、参考にしながらグループワークを行うと効果的だった
- ◎休講した場合の補講の問題

⑥短期大学の2年間で、実践的指導力を培っていくことは今日的な学生の実態から考えると厳しい。学生の意識や意欲を向上させ、教師としての人間性、専門性等を身につけさせることの困難性を感じている

⑦教育委員会や学校との連携については、今のところ講演のみ。それ以上は余裕がない

各短大のおかれている事情による課題もみられるが、保育実習との兼ね合いや2年間のなかで学生の実践的指導力を養成することの困難性もあげられ、短大で演習を実施することの難しさも示された。一方で、「卒業前の半年は、実習も終えているためか「ゆるみ」がちになるが、教職実践演習を持つことで自らの成長と課題を自覚する上では有意義であった。やってみればそれなりの意味はあったという実感は持てた」との回答もあり、演習の有効性も示された。

2) 本学における課題

本学でも、実施していくなかで担当者が実感した課題について共有し、昨年度の課題を踏まえて、授業方法や内容について検討した。以下では2011年度と2012年度の課題を示し検討をしたい。

<2011年度の課題>

「教職実践演習」

◎調査依頼について（どこにお願いするか）

「保育・教職実践演習」

◎事例研究や場面指導に関する授業では、解答の定型化を避けたり、思考を深めるための配慮が必要

◎保護者対応等、学生自身が未体験の事柄に関しては、実感が掴みにくい（特に保護者や保育者の気持ち）

◎学生の感じている問題点を具体的、包括的に把握し、授業に反映できればよかった

◎「実習を振り返ってどうであったか」を繰り返し問いかけていく必要がある

◎実習日誌や指導案を持参させ、参考にしながらグループワークを行うと効果的だった

◎ゲストスピーカーとの打ち合わせが不十分だった

◎通常のクラスとは違っていたため緊張感があった。グループワークや話し合いやロールプレイが効果的ではない場面もあった。人数も多い（30～38名）

◎最終回に履修カルテの「事前・事後評価票」と現地調査のレポートを用いて学生との面談を行ったが、担当者一人当たりの学生数が多く、かなりの時間を要した（3時間以上）ので、1コマで実施するのは困難

◎教職実践演習での「活用」という履修カルテの本来の意義が果たせなかった

◎他の講義内容との差別化をどう図るか

<2012年度実施しての課題・問題点>

「保育・教職実践演習」

- ◎子どもの言葉遣いや教師の言葉掛けを振り返りながらの学習を行ったが、履修カルテには該当する記述内容がほとんどなかった。実習の内容や気づき、実習先の教員のコメントなどが記載されているもの（実習日誌か？）が使えるとよかった
- ◎演習では、すでに学生自身が記入した履修カルテの内容を参照させる形で活用したが、授業での学びや振り返りなどを履修カルテに記入できるようなものにした方が、カルテが充実するのではないか
- ◎保育実習の前の授業だったので、指導案作成の意義や活動目的の明確化という面で、重要な内容であった。これまでの実習記録を自己チェックするという点で有意義であったが、時間の関係もあり、形式的なチェックになっていたように感じる
- ◎授業内での学生個人での発言はあるが、発言内容の検討や熟慮する時間が不足しているように思われる。
- ◎オムニバス形式のみのため、学生は総論として受け止めているように思われる。課題の発見－検討－まとめ（発表）に十分な時間配分ができるような授業形態が必要だと思われる
- ◎学生番号順でなく、通常授業を受講しているクラス単位の方がワーク等はしやすいか？

以上、各演習の2011年度と2012年度の課題を挙げたが、ここでは「保育・教職実践演習」について検討したい。2011年度の課題のなかでは、履修カルテが学生の記録のみにとどまり、演習内で活用できなかったことが、大きな課題であった。そこで、2012年度、毎回担当者が履修カルテを持参し、学生に配布して活用を図った。しかし、カルテの記載内容が演習の内容によっては活用できず、また演習で獲得した内容をカルテに反映することができなかった。そこで、来年度は、演習での内容を随時書き込むことができるようなページの作成や、演習で使用したワークシート等を挟み込んでいくようにしていくなど、履修カルテが演習での学びを蓄積できるような活用の方法も検討が必要であると考えられる。

「保育・教職実践演習」では、1クラスの人数が多いことによる課題もあげられる。グループワークを実施して対応した回もあったが、より効果的な方法が必要であると考えられる。また2011年度は最終回で面接を実施したが、1クラスの履修人数が多いことから一人あたりの時間も限られ十分に対応できなかった。今年度は、面接の形式を取らず、クラス単位で事後評価を行い、ワークシートを用いて演習の振り返りを行い、全体の総括を行った。

5. おわりに

本学を含め各短期大学では、1年目に実施した際に挙げられた課題を踏まえ、改善や検討を行った。2年目に教職実践演習を実施するにあたり、1年目で実施した枠組みを大幅に変更する短大もあったが、本学における課題でも挙げたように、2年目の実施ではまた新たな課題も浮かび上がった。こうした課題を克服しながら、教職実践演習を学生の「質の保証」にふさわしい演習へと深化させていくことが求められる。2013年度より4年制大学において実施されるが、大学での実践も参考にして、改善や検討を図っていきたい。本学においても、担当者やゲストピーカーとの検討を重ね、問題を共有し、試行錯誤を重ねながら、2013年度以降も改善を進めていきたい。

— 註 —

- i 本稿は2012年12月15日に開催された関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会第2回研究懇話会シンポジウム「教職実践演習をどう進めるか」において報告した内容をもとにしている。
- ii 報告に先立って実施したアンケートに際して、関私教短大部会に参加している各短期大学の協力をいただいた。今回、本稿の投稿について快諾していただいた短大部会の皆さまに厚く御礼申し上げます。
- iii 小学校教諭二種免許・幼稚園教諭二種免許・保育士資格取得クラスの一部の学生は「教職実践演習」と「保育・教職実践演習」の両方を履修している。
- iv 「現場での実習」と「模擬保育」を実施しない理由として、学生数の問題もある。履修する学生数が多く、「現地での実習」の受け入れ先を確保することが難しく、また「模擬保育」に関しても1クラス当たりの人数が30人か32人で、実施したとしても十分な効果が期待できないと思われるためである。

短期大学における「教職実践演習」の取組状況について

資料 1

教職実践演習			履修カルテ		千葉敬愛短期大学			
取得見込み資格・免許状 () 小学校教諭二種免許状 () 幼稚園教諭二種免許状 () 保育士資格			平成 24 年度入学					
【Ⅰ】授業に対する自己評価								
教育職員免許法施行規則に定める科目			授業科目	修得年度・期		成績 担当教員名 自己評価		
				1年 前期	1年 後期		2年 前期	2年 後期
基礎科目	定められた科目に		日本国憲法					4・3・2・1
			情報処理					4・3・2・1
			英語コミュニケーション					4・3・2・1
			基礎体育講義					4・3・2・1
			基礎体育実技					4・3・2・1
			文章表現法					4・3・2・1
			敬天愛人ゼミナール					4・3・2・1
			倫理学					4・3・2・1
			自然科学入門					4・3・2・1
			時事問題解説					4・3・2・1
教科に関する科目			国語(書写含む)					4・3・2・1
			社会					4・3・2・1
			算数					4・3・2・1
			理科					4・3・2・1
			生活					4・3・2・1
			音楽					4・3・2・1
			音楽(器楽Ⅰ)					4・3・2・1
			音楽(器楽Ⅱ)					4・3・2・1
			図画工作					4・3・2・1
			家庭					4・3・2・1
			体育					4・3・2・1
			教職に関する科目	2欄	教職の意義に関する科目	初等教育教師論		
幼児教育教師論								4・3・2・1
3欄	教育の基礎理論に関する科目	教育原理						4・3・2・1
		教育心理学						4・3・2・1
		保育の心理学Ⅰ						4・3・2・1
		教育制度						4・3・2・1
		保育原理Ⅰ						4・3・2・1
4欄	教職課程及び指導法に関する科目	教育課程論						4・3・2・1
		国語教育法						4・3・2・1
		社会教育法						4・3・2・1
		算数教育法						4・3・2・1
		理科教育法						4・3・2・1
		生活教育法						4・3・2・1
		音楽教育法						4・3・2・1
図工教育法						4・3・2・1		

資料2

本質・目的の理解	選択必修科目	指定保育士養成施設において設定	保育原理Ⅱ（指導計画案の作成）						4・3・2・1
			保育原理Ⅲ（保育所保育指針の解説）						4・3・2・1
			児童文化Ⅰ						4・3・2・1
			児童文化Ⅱ						4・3・2・1
			社会的養護内容Ⅱ（生活環境等）						4・3・2・1
			社会的養護内容Ⅲ（心身の障がい等）						4・3・2・1
			在宅保育						4・3・2・1
			リトミック						4・3・2・1
保育実習	保育実習Ⅱ	保育実習Ⅱ（保育所）						4・3・2・1	
		保育実習指導Ⅱ						4・3・2・1	
		保育実習Ⅲ（施設）						4・3・2・1	
		保育実習指導Ⅲ						4・3・2・1	

*自己評価は該当する数字を○で囲むこと。

4:十分理解できた 3:概ね理解できた 2:努力を要する 1:理解が不十分である

一年間を振り返っての自己評価	
教員からのコメント	
平成 年 月 日	
教員名	

教職実践演習を受けるにあたっての自己評価	
教員からのコメント	
平成 年 月 日	
教員名	

資料 3

【Ⅱ】教育実習についての記録

[illegible]

資料4

【V】保育・教職実践演習(幼稚園)事前、事後評価票

千葉敬愛短期大学

教師として必要な事項	到達目標	目標到達の確認指標	自己評価(H...)	教員評価(H...)
使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	○教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身に付いている。	1. 誠実、公平かつ責任感を持って子どもに接し、子どもから学び、共に成長しようとする意識を持って、指導に当たることができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
		2. 保育者の使命や職務についての基本的な理解に基づき、自発的・積極的に自己の職責を果たそうとする姿勢を持っているか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
	○高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職責を果たすことができる。	3. 自己の課題を認識し、その解決に向けて、自己研鑽に励むなど、常に学び続けようとする姿勢を持っているか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
		4. 子どもの成長や安全、健康管理に常に配慮して、具体的な保育活動を組み立てることができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
社会性や対人関係能力に関する事項	○教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。	5. 挨拶や服装、言葉遣い、他の教職員への対応、保護者に対する接し方など、社会人としての基本が身に付いているか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
		6. 他の教職員の意見やアドバイスに耳を傾けるとともに、理解や協力を得ながら、自らの職務を遂行することができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
	○組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。	7. 組織の一員として、独善的にならず、協調性や柔軟性を持って、校務の運営に当たることができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
		8. 保護者や地域の関係者の意見・要望に耳を傾けるとともに、連携・協力しながら、課題に対処することができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
幼児児童理解や学級経営等に関する事項	○教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。	9. 気軽に子どもと顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
		10. 子どもの声を真摯に受け止め、子どもの健康状態や性格、生育歴等を理解し、公平かつ受容的な態度で接することができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
	○組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。	11. 社会状況や時代の変化に伴い生じる新たな課題や子どもの変化を、進んで捉えようとする姿勢を持っているか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
		12. 子どもの特性や心身の状況を把握した上でクラス経営案を作成し、それに基づく学級づくりをしようとする姿勢を持っているか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
教科・保育内容等の指導力に関する事項	○子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができる。	13. 自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした保育指導案を作成することができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
		14. 子ども一人一人の特性に応じ、発達課題に即した指導ができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
	○子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行うことができる。	15. 子どもの主体的な活動を促すために、よき理解者、共同作業者などさまざまな役割を果たすことができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否
		16. 基礎的な知識や技能について反復して教えたり、板書や資料の提示を分かりやすくするなど、生きる力の基礎の定着を図る援助を工夫することができるか。	事前4・3・2・1 事後4・3・2・1	合・否

4:よく理解している 3:理解している 2:やや理解が不足している 1:理解が不足している

担当教員